

物語行為論・言語行為論から読む『大つごもり』試論

—少女のモラル・ジレンマ—

笹川洋子

一 はじめに

『大つごもり』は明治二十七年十二月三十日に『文学界第二十四号』に発表された。一葉は、井原西鶴等を下敷きに『大つごもり』で新年を迎える大晦日の慌ただしさと悲喜劇を描いたと言われるが、この小説は、西鶴のように滑稽で洒脱な物語としてだけではなく、社会の底辺に生きる人々の悲しさや社会の不合理を訴える物語としても読むことができる。物語の舞台は大晦日の山村家である。奉公人のお峯は伯父一家の窮状を救うため、雇い主の御新造に約束した給金の前払いを願い出るが、取り合ってもらえない。そこへ、山村家の放蕩息子、石之助が年越しの金をせびりに家へ帰ってくる。思い詰めたお峯はついに山村家の金を盗んでしまい、舌をかみ切ろうと覚悟する。物語の結末は次のように結ばれる。お峯が二円だけを引き出した懸硯の金が、二十円の束のままなくなり、「引出しの分も拜借致し候 石之助」の書き付けが底から見つかった。人々はやれ石之助の放蕩かと呆れ、お峯の詮議はなかった。「孝の餘徳は我れ知らず石之助の罪に成りしか、いや／＼知りて序に冠りし罪かも知れず、さらば石之助はお峯が守り本尊なるべし、後の事しりたや」。この「後の事しりたや」という余韻を残す結びの言葉や物語に散在する表現をめぐって、研究者により様々な解釈が試みられてきた。山田有策（二〇〇三）は、一葉文学

の中で『大つごもり』ほど終末部の読みをめぐって論の錯綜する作品はないと記す(山田有作、前掲書、八四頁)。本稿では、こうした『大つごもり』執筆の背景、物語の解釈をめぐる論議の流れを踏まえ、まず一葉の『大つごもり』執筆の状況を紹介し、この作品の創作意図をめぐる論議を整理する。次に、ジェラルド・ジュネット(Gerard Genette)等の物語分析論を参考に、物語の構造分析の視点から、物語の語り手の視点に焦点をあて分析していく。^(註1)なおジュネットの手法では、絵画を例にすると、作品の構図、色彩構成、モチーフの配置などは明らかになるが、その絵画全体が鑑賞者に訴えかけてくるものは理論の範囲外に置かれている。こうしたモチーフの一つ一つである個々の要素が多層性を成し、その結果、総体として絵画全体から溢れてくるものを捉えるには、物語の構造を越えて、シハエル・バフチン(Михаил Михайлович Бахтин)が指摘したように物語における語りの多声性(ポリフォニー: polyphony)を考へる必要がある。テキストの織りなす多層性を探るには、物語の全知の語り手だけではなく、物語の登場人物の個々の語りの織り成す多声性を観察しなければなるまい。そこで、本稿ではさらに『大つごもり』における多声性を探るために、ジョン・オースティン(John Austin)、『ジョン・サール(John Rogers Searle)等の言語行為論の分析手法を用いて、登場人物たちの言語行為を分析する。そして、ローレンス・コールバーグ(Lawrence Kohlberg)の道徳性発達理論を重ね、謹厳実直な少女お峯が盗みという壮絶な状況で、モラル・ジレンマを体験したという読み取りを進めていきたいと思う。

二 『大つごもり』をめぐる論議

二・一 『大つごもり』をめぐる論議

まず、一葉の『大つごもり』創作の状況やその際、参照したと思われる文献等に触れ、執筆に至る背景を簡単に紹介する。

一葉は明治二十七年十二月三十日にこの『大つごもり』を『文学界第二十四号』に発表しているが、発表までの経緯を見ると、同年十一月二十三日に星野天知より、十二月四日に平田禿木より寄稿を依頼され、十二月十九日付けで戸川秋骨が受領書を送っている（菅聡子、一九九六、一〇四頁）。物語が創作された背景に目を転ずると、一葉は執筆に先立ち、十月十九日以降に平田禿木より『西鶴全集』を借りている。そして、執筆の翌年になるが、明治二十八年一月二十日に訪問した戸川残花からドストエフスキーの『罪と罰』（内田魯庵訳）を借り、繰り返し読み込んだと言われる。この当時、一葉は経済的にかなり逼迫しており、借金に走り回っている。この『大つごもり』も、『文学界』の星野天知に年越しのための二十円を融通してもらった見返りに、起草されたという経緯がある（田中優子、二〇〇四、高田知波、一九九七、他参照）。この時期、一葉自身もかなり逼迫した境遇に置かれていたのである。

こうした状況下で『大つごもり』は描かれたわけだが、一葉の創作意図をめぐる論争は、二つの解釈可能性を示す論に概ね集約される。一方は、主に西鶴をはじめとする古典から物語構成を借用したということと、一葉が生活の中で抱いたであろう望みを物語に託したことを論拠とし、一方はドストエフスキーと日記に見られる一葉の自我の目覚めの記述と、物語の場面設定や登場人物の台詞を論拠としている。一読して単純な文脈でありながら、こうした解釈可能性の多様な読みを許すところが一葉文学の魅力であり、また一葉研究の難しさを暗示している。

菅聡子（一九九六）は『大つごもり』に関する研究の概要を次のように記している。「『大つごもり』をめぐる論議は結びの一文から喚起される『後の事』をめぐる空白を読むことに集中して来た。近年は、その論議の偏りに疑問を呈し、お峯のセクシュアリティの問題への言及や、同時代の『下女を主人公とする物語』のコンテクストの中での『大つごもり』再考、あるいは本文中の『正直』の語を軸にしたお峯の内面の変貌への注目など、新たな問題提起が試みられている。（菅聡子、前掲書、三九頁）」。

本稿では、先行研究を参考に、『大つごもり』の終結部をめぐる論争、すなわち物語の解釈可能性についての議論を二つに整理し、簡単に紹介する。一つめは、彼女を救った石之助との未来を暗示する幸福な古典のお伽話としての解釈、二つめは、社会の不合理に押しつぶされ、さらに将来彼女が世の中の深い闇へと追いやられるであろう悲劇を描く近代小説としての解釈である。なお、作者の創作理念まで踏み込まず、解釈をテキスト分析の地点に止めようとする近年の論として、「贈与」(関礼子、一九九八、松下浩幸、二〇〇二、他)、「反転するモラル」(小林裕子、一九九四)、「お峯を盗みへと追い込む物語構造」(谷川恵一、一九九三、高田知波、一九九七)、「大つごもりの遠近法」(朝野洋、一九九五)、そして「お峯の内面の変貌」(山本欣司、二〇〇九)等の論点があげられるが、これは『大つごもり』の近代小説としての物語感覚を顕在化するという意味で、第二の近代小説として解釈を下す論に含めておきたい。^(注5)

それでは、第一の解釈に連なる古典文学が『大つごもり』に与えた影響について考えていくことにしよう。

二・二 『大つごもり』と古典文学

本節では、『大つごもり』への古典文学の影響を論拠とする、一つめの古典のお伽噺に連なる解釈を見ていく。和田芳恵(一九五八)は「すぐれた社会小説になるべき筈の素材が、人情小説に終わった」と指摘しているが、これはお伽話に見られる勧善懲悪という物語の型が『大つごもり』に見いだされることを前提としたものである。同様に、前田愛(一九七九)も次のように記している。石之助の「引出しの分も拝借し候」という「受取一通」は「石之助からお峯にあてた『賢者の贈り物』であったことはいうまでもない。『大つごもり』は、金銭をめぐる抑圧と解放のドラマなのである(前田愛、前掲書、一九二頁)」。また、大井田義彰(二〇〇二)等は石之助の「行為を物語の重要なモチーフとなる『侠客』と評し、古典文学との関連を論じている。

西鶴をはじめとする古典文学は『大つごもり』の創作にどのように影響していたのだろうか。一葉が創作にあたって西鶴の『世間胸算用』を雛形としたことはたびたび言及されている。江戸文学の研究者、田中優子（二〇〇四）は、『大つごもり』は西鶴の「大晦日はあはぬ算用」をもとにしたものだが、大晦日における明治の富裕層と貧民街の対照性を描いたという点では、明治版『世間胸算用』であろうとしている。西鶴の洒脱な結末が一葉作品に投影されているということになる。同様に、橋本威（一九八三）は近松浄瑠璃集の『伽婢子』の類型を、中込重明（二〇〇二）は明治二二年に新富座で上演され、評判になった「人間万事金世中」の影響を『大つごもり』に見ている。また、小林裕子（一九九四）と松下浩幸（二〇〇二）は、同時代の人々は石之助の行為は鼠小僧を彷彿とさせたであろうと記す。大井田義彰（二〇〇二）は、一葉の日記の記述から彼女が「仁侠擬人」に惹かれていたことに触れ、「この小説に『侠客』による弱者救済のモチーフが潜んで（大井田、前掲書、四〇頁）」いる可能性を論じている。明治二六年八月十日の日記で一葉は子ども頃、草双紙を夢中で読んでいたと回想している。^{（註）}

また、滝藤満義（一九九八）は、『大つごもり』に「塩焼長者」と「大歳の客」の話形を見いだし、一葉が未定稿のあら筋、お峯の盗みの現場を石之助が見とがめ、お峯の無謀をたしなめるという話を放棄したのは、西鶴的な「はなし」の軌道、落ちの切れ味に戻すためではなかったかと指摘している（滝藤満義、前掲書、一三六―一三七頁）。一葉の生活環境を考えると、金策に苦労していたことを一葉はたびたび日記に記しており、松阪俊夫（一九七〇）は、貧窮の境遇にあった一葉が石之助のような存在の出現を願ひ、それが「石之助に積極的にお峯を救わせる結末に運ばせているのではないか」と述べている。塩田良平（一九六八）は半井桃水の未亡人から桃水が果園を介して一葉に毎月十五円与えていたということを聞いており（塩田良平、前掲書、七四五頁）、これが真実であれば救い主としての石之助と桃水がごく自然に重なる。

ここまで、古典文学、人情小説、英雄物語などの枠組みを念頭に一葉が小説を書き進めたという読みを見てきた

が、これに対して、『大つごもり』に潜む近代小説性に着眼し、社会の不合理、そして創作に対する近代的な感覚を読み取る論がある。次節では『大つごもり』の近代性に着目する論について見ていくことにしよう。

二・三 『大つごもり』に見られる近代性

『大つごもり』の近代性は主に二つの視点から論じられている。一つは、この小説が訴える社会的不合理という主題、もう一つは物語が近代的な感覚によって描かれているという点である。まず、『大つごもり』に貧者の貧困や悲劇といった社会的不合理を見る研究を概観していきたい。

冒頭で触れたように、執筆の翌年になるが、一葉は明治二十八年一月二十日に訪問した戸川残花からドストエフスキの『罪と罰』（内田魯庵訳）を借り、繰り返し読み込んだと言われる（塩田良平、前掲書、五六五―五六六頁、他参照）。原作では六巻とエピソードからなる『罪と罰』は、日本語訳ではその内の三巻分だけが明治二五年（二八九二）と明治二六年に分けて出版され、文壇で英訳、ドイツ語訳、ロシア語訳と、それぞれの翻訳に基づいた研究者の立場からの翻訳論争が起っている（西野常夫、二〇〇八、参照）。なお、内田魯庵は英語訳を底本としている。こうした文壇を取り巻く状況からも、この作品が世間の注目を浴びていたことがうかがえる。実際に一葉が作品を読んだのは、『大つごもり』の脱稿後だが、その粗筋については大方知っていたと推測される。また、一葉が年越しの二十円を融通するためにこの作品を執筆した経緯は前述した通りであり、『大つごもり』執筆の時期の日記を欠くが、一葉が苦しい生活の中で「社会の矛盾や不正義を激しく憤ると同時に不敵な覚悟さえ抱く女性へと変貌しつつあったことは先学の説くところである。（高田知波、一九九七、十七頁）」と指摘されている。

高田知波（前掲書）は、お峯は石之助の行為によってさらに追い詰められ、お峯には自らの身を売るしかない救いのない未来が暗示されていると論じる。「余情に富むように見える『大つごもり』の末尾表現は、実は救いのな

い未来を暗示していると言わねばならないわけであるが、だとすれば金銭の問題で絶体絶命の窮地に追い込まれたお峯が、なおかつ安兵衛に対する孝心を立証していくために残された方法は、みずからの肉体を商品化する「苦界」への道しかなかったのではないかとということが考えられる（高田知波、前掲書、一三三頁）。また、小林裕子（二九九四）、木村真佐幸（一九七五）、北田幸恵（一九九五）も現実の過酷さの反映をこの作品にみる。「貧しい娘には、『正直律儀』に生きたいという清廉な望みすら叶えることができないという冷徹な社会認識を、『大つごもり』の写実的描写によって描き切ってしまったこと、さらに半ば偶然的の慈善的行為による救いは一時的なものにか過ぎず、お峯を最終的に救済するものにはならないことを、一葉が見通していた。（小林裕子、前掲書、一二三頁）」。木村真佐幸「語り手が強引に楽天的に隠蔽している。石之助の行為は気まぐれでしかない。安兵衛一家は三ヶ月後、同じ事態に逢着せざるを得ない。（木村真佐幸、前掲書）」。『遊女、妾奉公への一步手前としての下女の大晦日を描いている（北田幸恵、前掲書、四三頁）』。菅聡子（一九九六）は、同様の視座をとりながら、さらに語り手の積極的な関わりを読み込み、語り手は最後に語りを閉じることで、思い現実を抱え込みながら「なお人は生きていかなければならない、という事実」をお峯に厳しく突きつけているとする（菅聡子、前掲書、参照）。

一葉が、古典や近代小説を自由自在に読みこなす才を持ち、創作の糧としていたことは疑いがなく、また一方で、日記の記述には社会の通念といったような固定した思考に捕らわれず、義侠心と批判精神を持ち、柔軟に社会や人々を見つめていた一葉の鋭い観察眼が投影されているも確かである。しかし、このような一葉の背景を手がかりとして、作品の意図を推測する手法では解釈可能性が拡散してしまう懸念がある。そこで、先に紹介した二つの読みの延長線上にありながら、分析視点を多少ずらし、テクストに立ち戻る立場から、解釈可能性を論じた第三の読みを紹介しよう。山田有策（二〇〇三）は「別次元で異なる物語に生きてきた二人の若い男女の一瞬の交錯を描き、読者（観客）に『後のこと知りたや』と思わせるように仕組まれたのが、この『大つごもり』という一篇に他

ならなかったのではないか(山田、前掲書、八九頁)」と記す。小林裕子(一九九四)は「お峯は孝行と正直の美德によって盗みの『悪』を反転させようとし、石之助は貧民救済によって不孝の『悪』を反転させようとする(小林裕子、前掲書、一二〇頁)」とし、悪の中に善があり、善の中に悪があるという悪と善の反転などの考察を加えている。他にも、定型である美男美女の記述が最低限に抑えられたセクシュアリティのなさ(小林裕子、一九九四)、お峯に心理的抑圧を与える状況設定の巧みさ(前田愛、一九七九、高田知波、一九九七)などの分析視点が既にあげられている。なお、朝野洋(一九九五)は『大つごもり』が「石之助の母を遠景に、近景にお峯を、中景に石之助を、そして遠景に消失点ともいうべき実母を配して、遠近的な小説空間を獲得できた(朝野洋、前掲書、三八頁)」と述べ、山本欣司(二〇〇九)は、お峯の発話を読み込み、お峯の変貌に言及している。これらは、それぞれ本論のとる物語行為論と言語行為の視点に重なる。

ここでは、一葉の創作意図をめぐる論議を概観してきた。しかし、『大つごもり』は、それまでの「勸善懲悪」、「美男美女」という物語の類型から離れ、近代的な精神を持った物語世界を持ち、私たちに対峙してくる。優れた物語はバフチンが言う語りの多声性(ポリフォニー: polyphony)を持つと言われる。一葉のテキストにおける多様な解釈可能性は、この多声性から生み出されていることは確かである。そして、テキストの織りなす多層性を探るには、物語をさらに別の視点から読み解き、物語に登場する人物の個々の語りを観察しなければなるまい。

本稿では、一葉のテキストの持つ多層性を探るために、これまでとは別の側面から、この『大つごもり』を見ていきたいと考えるが、ここでは一度テキストに立ち帰り、テキストがどう語られるか、さらに登場人物がどのような発話を行うかというテキスト分析の視点から『大つごもり』を捉える試みを行う。そのためには物語行為論と言語行為論という理論枠組みを借りる必要がある。

三 物語行為論から見る『大つごもり』の語り手

三・一 物語論という視座

『大つごもり』はある語り手によって語られる物語である。この物語の語り手は、全知の語り手とも言われ、物語の行方を支配する。菅聡子（一九九六）は『大つごもり』の語り手を自信に溢れた「自立的な語り手」と名づける。本稿でも物語の語り手に注目するが、さらにこの全知の語り手がどのように物語を語るか、物語行為論の視点から『大つごもり』を読み直してみたい。ここでは、物語の語り手の視点を定め、テクストを俯瞰するために、ジェラルド・ジュネットの物語分析論を拠り所にした。ジュネットの手法は構造的な物語分析と言えよう。ジェラルド・ジュネットの物語行為論では物語言語を「時間 (temps)」「相 (aspect)」「叙法 (mode)」の概念によって考える。例えば、「時間」には物語の中で過去と現在がどのような順番で語れるかを見る「錯時法」という視点がある。菅聡子（前掲書）は『大つごもり』では「〈大つごもりの一日に集約されるドラマ〉は、さらにその日、お峯がまさに盗みを犯す瞬間に向かって語りの緊張と加速度を増す（菅聡子、前掲書、四二頁）」としているが、物語られる時間を分析すると、冒頭で過去に比重を置きながら、始まった語りは、過去、現在と入れ替わり、物語の終結部では一気呵成に現在の物語が語られることが顕在化する。ここでは、物語の場面を「I冒頭部」、「II初音町への見舞い」、「III大晦日の山村」の三つに分け、それぞれの場面における物語時間を考えてみよう。

『大つごもり』の「I冒頭」では「現在（九四字）―過去（八五七字）―現在（一八五字）」と過去に比重が置かれ、「II初音町への見舞い」では「過去（二二六字）―現在（二六〇字）―過去（三九九字）―現在（八九一字）―過去（二二五字）―現在（一五八二字）」と過去と現在が入れ子状になる錯時法を用いながら、徐々に現在に語りの比重が置かれていく。そして「III大晦日の山村の一日」では、「過去（六五一字）―現在（三五六六字）」と視点は一気に現在に移り、即時法による語りは終結部まで勢いよく続き、臨場感を高める。この小説では、過去の回

想を除いた、初音町の日(二七三三三)と大晦日の山村(三五六六六)の現在の時間が対比されるが、大晦日の山村での出来事により大きく比重が置かれ、小説が構成されていることがわかる。

また、『大つごもり』ではいくつかのモティーフが繰り返される。これはジュネットの物語論では「頻度」として扱われる。ここでは可能性を言及するだけに止め、さらに、ジュネットの物語行為論から物語の語り手の「内的焦点化」と「外的焦点化」という視点を選び、この物語を読んでみたい。

三・二 『大つごもり』の語り手の視点

『大つごもり』は全知の語り手によって物語が語られる。菅聡子(一九九六)は一葉のそれまでの作品として比較して、『大つごもり』の語り手は「はるかに物語に対する統率力が強く、同時に読者にとっての〈読む時間〉の形成をも意識のうちに置いている。語ることがらに対する支配力が強く安定しており、物語の氾濫に飲み込まれることもない(菅聡子、前掲書、三九頁)」と述べる。前節で触れたように『大つごもり』をめぐる議論は「後の事しりたや」という全知の語り手の語り、すなわち物語行為に集約されるが、これは『大つごもり』を特徴づけているのは、この自律する全知の語り手の物語への関わりであることを象徴しているように思える。ただし、菅はこの全知の語り手が何をどのように語るかという物語行為の地点までには踏み込んでいない。そこで本稿では、全知の語り手が何をどのように語るかを探ってみた。また、言うまでもなく物語の語り手には、全知の語り手に加え、物語の中心で言葉を発し、心情を独白するお峯をはじめとして、物語の中で発話者として描かれる石之助、ご新造、石之助の父親、安兵衛、婆などの数々の登場人物、そして噂を語る不特定多数の人々が含まれる。こうした様々な登場人物の物語行為についても見ていくことにしよう。

まず、ジュエラー・ジュネットの物語論を参考に、語り手の物語行為について整理していく。ジュネットは物語

行為を整理するためにいくつかの概念を提示している。ここでは、距離と焦点化という視点から、内的焦点化と外的焦点化を選び、考えてみたい。内的焦点化はある対象（人物）によって知覚された事柄を描く。その対象の内面にある思考や感情が表現される。池上嘉彦（二〇〇六）のいう「主観的把握」にあたる。外的焦点化とは、ある対象（人物）を外側から描く。行動や発話は描かれるが、思考や感情は窺い知れない。池上嘉彦が「客観的把握」と呼ぶものである。『大つごもり』では、全知の語り手が内的焦点化をする登場人物と、外的焦点化に止める登場人物に分かれる。最も内的焦点化が行われるのは、主人公のお峯である。全知の語り手はお峯の内に入り、刻々と変化する、その心情を描き、外側からお峯の言動を記述する。お峯以外の人々について、『大つごもり』で語り手はほとんどの人々の言動を外焦点化によって描く。しかし、例外として山村の御新造の数カ所の描写と、少年三之助と石之助の心中がそれぞれ一箇所、内的焦点化される箇所がある。安兵衛、石之助の父など、他の登場人物については語り手の視点は外的焦点化に止められている。

それでは、山村の御新造、三之助、石之助、そして語り手自身が内的焦点化される語りについて確認していこう。なお、お峯が内的焦点化される語りについては、次節の言語行為で詳しく触れたい。

山村の御新造は、お峯の次に語り手が内的焦点化を行う人物である。客観的な描写による外的焦点化の語りの中で、山村の御新造はその辛辣な語り口や意地の悪い行動を随所で描かれる。さらに、他の人物では語り手は心の内側に入ることさえしないが、御新造については内的焦点化をしている記述が三箇所ある。「憎くしと思へど流石に義理は愁らき物かや」、「花紅葉うるはしく仕立し娘たちが春着の小袖、襟をそろへて襟を重ねて、眺めつ眺めさせと喜ばんものを、邪魔ものゝ兄が見る目うるさく、早く出てゆけ疾く去ねと思ふ思ひは口にこそ出さねもち前の疳癩したる堪えがたく、智識の坊さまが目には御覽じたらば、炎につゝまれて身は黒烟りに心は狂亂の折ふし」、「生死の分目といふ初産に、西應寺の娘がもとより迎ひの車、これは大晦日とて遠慮のならぬ物なり、家のうちには金も

あり、放蕩どのが寐ては居る、心は二つ、分けられぬ身なれば恩愛の重きに引かれて、車には乗りけれど、かゝる時氣樂の良人が心根にくゝ、今日あたり沖釣りでも無き物をと、太公望がはり合ひなき人をつくゝ」と恨みて（御新造ごうられぬ）。

そして、語り手は一瞬であるが、間接話法により三之助に内的焦点化をし、自分のみすばらしい格好のために姉が肩身の狭い思いをするかもしれないと思ひ、勝手口に戻つたとある。「我が身のみすばらしきに姉の肩身を思ひやりて（勝手口より怕々のぞけば）。同様に語り手は一瞬、石之助の心に分け入る。「（石之助とて山村の總領息子、母の違ふに父親の愛も薄く、これを養子に出して家督は妹娘の中にとの相談、十年の昔より耳に挟みて）面白からず、（今の世に勤當のならぬこそをかしけれ）、思ひのまゝに遊びて母が泣きをと父親の事は忘れて（十五の春より不了簡をはじめぬ）」。

最後に、一葉作品に特徴的な内的焦点化をあげたい。「大つごもり」の特徴は、語り手自身の心情が吐露されており、読者は語り手に内的焦点化をする箇所があるということである。「割木ほどの事も大臺にして叱りとばさるる婢女の身つらや」「かゝる鬼の主をも持つぞかし」「可愛や（雪はづかしき膚は紫の生々しくなりぬ）」「（八百安が物は何時も帳面につけた様など笑はるれど）愛顧は有がたきもの」「これが此人の十八番とはてもさても情なし。」「始終を見し人なしと思へるは愚かや。」「行先は何處、父が涕は一夜の騒ぎに夢とやらならん、持つまじきは放蕩息子、持つまじきは放蕩を仕立る繼母ぞかし。」「孝の餘徳は我れ知らず石之助の罪に成りしか、いや／＼知りて序に冠りし罪かも知れず、さらば石之助はお峯が守り本尊なるべし、後の事しりたや。」「菅聡子（一九九六）は「能動的語り手」と表現したが、その能動性は読み手が語り手の心に入る、すなわち内的焦点化によって創り出されていることがわかる。さらに、全知の語り手の語りは、登場人物と語り手の両方の口調をそなえる「自由間接話法」としても分析できる。文中に現れる次の文章は全知の語り手とお峯の心情か定かではない。「婢女の身つら

や。「かゝる鬼の主をも持つぞかし」、「可愛や（雪はづかしき膚は紫の生々しくなりぬ）」、「愛顧は有がたきもの」
 「これが此人の十八番とはてもさても情なし」同様に、結びの一節でも語り手とお峯の心情の境界は曖昧になる。
 「孝の餘徳は我れ知らず石之助の罪に成りしか、いや／＼知りて序に冠りし罪かも知れず、さらば石之助はお峯が
 守り本尊なるべし」。

さらに、内的焦点化、外的焦点化は、語り手と対象の心的距離を表し、それは読者の中で登場人物の前景化、後
 景化というような物語に於ける登場人物の位置の把握に反映されるであろう。つまり、一葉はお峯と御新造、一瞬
 ではあるが三之助と石之助、そして語り手自身を物語の前景で描き、安兵衛をはじめとする他の登場人物たちは後
 景に退かせて描いているわけである。石之助は『大つごもり』ではお峯と対比されるが、二人の世界の違いはお峯
 が「内的焦点化」によって前景化され、石之助は「外的焦点化」によって後景化されていることがわかる。山田有
 策（二〇〇三）はお峯と石之助は遠く隔たれていると指摘するが、一葉はお峯を前景化し、そして石之助を後景化
 することにより二人の距離を表現している。そして、一葉は周到に、石之助をお峯にとって、遙か彼方の遠い存在
 として描くことにより「さらば石之助はお峯が守り本尊なるべし」という一句を効かせるわけである。

なお、この物語では、ほぼ後景化している石之助の言動は読み手の心に第二の主人公とも言えるほど深い印象を
 与える。これは、なぜだろうか。この問題を考えるには、物語形式によって物語の構造分析を行う物語論の視点を
 越え、別の視点から物語を読み解く試みが必要であろう。本稿では、次に登場人物たちの発話行為に注目し、『大
 つごもり』の物語世界を考えてみたい。

四 『大つごもり』における言語行為

四・一 言語行為論の視点

ここまで、物語行為論から『大つごもり』の語り手の物語行為を觀察してきた。しかし、物語を俯瞰するような全知の語り手の振る舞いを見ただけでは物語を読みとったことにはならない。前述したように、語り手の分析は物語の周辺のメタ的なものであり、物語の本質はバフチンが多声性と呼んだものに他ならないからである。それは「小説の語り手の文と作中人物の言葉とが原理的にぶつかり合う」「二元的でありながら多重的な構成」とデリダが「範例性」と名づけた概念と重なる（青柳悦子、二〇〇九、参照）。そして、複雑な力が働く物語の舞台で、お峯をはじめとする登場人物の言葉は、全知の語り手と同様に私たちに強い印象を残す。こうした登場人物の語り力を探るために、ここで言語行為論を用いることにしよう。^{注5)}

登場人物の言動は物語行為論では語りとして一つのカテゴリで分類されているが、言語行為論の視点から見ると、その発話はさらに発話内行為、発語媒介行為として分析することができる。オースティンは、発話行為を発語行為、発話内行為、発語媒介行為からなるものと考えた。発語行為は音の並列として知覚される行為である。発話内行為はその発話によって話し手が何を行うか、すなわち「誘い」、「断り」、「告白」などの発話の機能と言えよう。発語媒介行為は発話が相手に与える効果である。例えば、「誘い」の発話は、「相手を喜ばす」かもしれないし、「相手を戸惑わせる」かもしれない。このように、その発話によって「相手を喜ばせる」、あるいは「戸惑わせる」という行為が発語媒介行為である。榊敦子（一九九六）は森鷗外の『雁』のお玉と帝大生岡田の言語行為をこの「発話内行為」と「発語媒介行為」という視点から分析し、お玉は物事を見る、觀察欲・觀察力があり、発話の効果、すなわち発語媒介行為を意識していること、反対に帝大生である岡田は見る力に欠けており、分析力の弱い人物として描かれていることを指摘している。ここでは、『大つごもり』のお峯と石之助、そして山村の御新造の言語行為を発話内行為と発語媒介行為から觀察してみたい。

なお、榊は觀察力という視点から発話行為をとらえているが、本稿では発話行為・発語媒介行為をコールバーク

の道徳性発達理論を参考に、発話者の道徳概念という視点を加え、言語行為を考えていくこととした。明治期にいらる一葉が、コールバークの道徳性発達理論を知る由もない。道徳性発達理論は子供の成長と重ね合わせ考えられた概念だが、登場人物の言語行為に当てはめることで、お峯の精神的成長が顕在化してくる。コールバークは、道徳性発達段階として、前慣習的段階、慣習的段階、脱慣習的段階という三つの段階を措定している。前慣習的段階では、道徳観念は行動によってもたらされる結果、罰や報酬などに基づいて形成される。慣習的段階では、他人を喜ばせたいという思いや、規則・法律に従うことが道徳観念の基準となり、脱慣習的段階では、法や社会的常識を越え、個人的な道徳原理に基づいた道徳観念を持つようになることとされている。そして、価値観の葛藤が起こるモラル・ジレンマの状況を越えることで、新たな道徳的価値観の段階に入ることができると言われる。小柳正司(二〇〇四)はコールバーク以降の道徳性発達理論の展開を概観し、エリオット・トゥーリル(Elliott Turiel)の社会的認知理論を整理している。本稿では、小柳正司(前掲書)を参考に、次のような三つの道徳性概念を措定したい。まず、社会慣習とは区別される道徳性はある程度理解しているが、自己中心的な制約を受ける「自己中心的段階」、より客観的で視野の広い概念でありながら、次にすべての人に一律平等という原則を基に公正や正義を考える「平等と互恵の段階」、最後に一律平等を超え、人の状況による特別な配慮や分配を考える「公正と正義の段階」である(小柳正司、前掲書、六〇頁参照)。言い替えれば、「自己中心的段階」では自分の欲求を満たすことが中心になり、「平等と互恵」の段階では、社会的規範や常識、法を遵守することが判断の基盤になる。「公正と正義」の段階では、法や規範の束縛を超えた、より広い視野から正義を考えることができる。山本欣司(二〇〇九)は、御新造との決定的な衝突はぎりぎりの所で回避させられ、お峯は爆発するエネルギーを封じ込められた、『大っこもり』はお峯の変貌を描き切っていないと表現しているが(山本欣司、前掲書、一六頁)、本稿では、お峯の道徳的観念に注目し、他の登場人物のそれと比べることで、一葉の描こうとした主題に迫ってみたい。

四・二 御新造と石之助の言語行為にみる道德観念

まず、お峯に次いで内的焦点化されるのが山村の御新造の発話である。つまり、山村の御新造は物語で前景化され、お峯と対になる人物として描かれているのである。

まず、外的焦点化された山村の御新造の言動を観察してみよう。例えば、冒頭でお峯が滑って手桶を壊したことを「身代これが爲につぶれるかのように御新造の額際に青筋おそろしく、朝飯のお給仕より睨まれて、其日一日物も仰せられず、一日おいてよりは箸の上げ下しに、此家の品は無代では出来ぬ、主の物とて粗末に思ふたら罰が當るぞえと明け暮れの談義、来る人毎に告げられて」とある。愷気で、口うるさく、意地の悪い女性の姿が浮かび上がる。「割木ほどの事も大臺にして叱りとばさる」という厳しさに一晚で逃げ出した女中もあったほどで、語り手は自分自身の心に内的焦点化をし、「かかる鬼の主を持つぞかし」と表現する。また、御新造のいつもの毒舌は石之助が帰った後の描写でも触れられる。「鹽花こそふらね跡は一まづ掃き出して、若旦那退散のよろこび、金は惜しけれど見る目も憎ければ家に居らぬは上々なり、何うすれば彼のやうに圖太くなられるか、あの子を生んだ母さんの顔が見たい、と御新造例に依つて毒舌をみがきぬ」。これらはいずれも外側から御新造の行動や発話を客観的に観察した語りである。また、気が変わりやすいことは「お峯が初音町に帰る折の願い出にも、一日すぎでの次の日、早く行きて早く歸れと、さりとて氣まゝの仰せに」と描かれる。お峯の前借りも申し出も、いったん請け負っておきながら、それを覆す。語り手は自分自身の思いを添え、次のように描く。「御新造は驚きたるやうの惘れ顔して、夫れはまあ何の事やら、成ほどお前が伯父さんの病氣、つゞいて借金の話しも聞きましたが、今が今私しの宅から立換へようとは言はなかつた筈、それはお前が何ぞの間違へ、私は毛頭も覺えの無き事と、これが此人の十八番とはてもさても情なし」。憎い石之助の存在は御新造の癩癩に抑えていることも、意地の悪さに拍車をかける。

「言ふ事もいふ事、金は敵薬ぞかし、現在うけ合ひしは我れに覚えあれど何の夫れを厭ふ事かは、大方お前が聞かへと立きりて、烟草輪にふき私は知らぬと濟しけり。」

悪人という印象が残る御新造だが、家族への思いを語る箇所も見られる。娘たちの春着姿を眺めて楽しみたいという箇所、また娘の初産の喜びが溢れる箇所である。また御新造が山村の商売を動かす働き者であろうことも、女中へのできばきとした指示の仕方や懸け硯を持ってこさせる言動からも見て取れる。しかし、その言語行為は吐責、文句がほとんどであり、御新造の客観的な言動は癩癩持ちで、気分が変わりやすく、意地が悪く毒舌と、悪役という印象を残す。一葉が御新造を描く際に、「善人对悪人」という単純な古典的図式から抜け出ていないと言われる所以であろう。御新造の毒舌は、感情のままに吐き出されたものか、人を傷つけるよう計算されたものか、推し量ることはできないが、少なくとも、人と関係を取り結ぶために人の様子を探り、自分の発話の効果を考えてという意味での良心的な発語媒介行為の記述は、義理のため致し方なく石之助の世話をする場面以外は皆無に近い。御新造を自分の欲求や気分次第で、自己完結的な世界で生きている人物として一葉は描く。

次に物語の語り手が御新造の心の内に入っていき、すなわち内的焦点化を行う箇所を見てみよう。石之助が憎いと思うが、義理のため、心を押し隠して、石之助に枕をあてがってやる。娘の晴れ着姿を楽しみたいのに、邪魔者の石之助がいる、癩癩を抑えがたく、「炎につままれて身は黒烟りに心は狂亂の折ふし」という有様とある。また、娘の初産の場面でも、家にある金と放蕩息子の子の組み合わせを案ずる。どれも、御新造が二つの思いの間で揺れる場面である。御新造は石之助に対して「義理」という社会的、慣習的な道徳観念は持っているものの、それ以外は、自分自身の地益や欲求が行動の原動力となっている。コールバーグの発達理論に重ねると、個人主義的、道具的道徳性と呼ぶ慣習以前の段階にあるもので、まさしく「自己中心的段階」にあると言える。

一方、御新造が敵のように思う石之助に語り手が内的焦点化をする箇所はごくわずかである。石之助は貧しいお

峯と違い、裕福な環境で育っているが、実の母はおらず、親の愛には恵まれない。石之助は総領息子だが養子にして、家督は妹娘にとの相談を、十年あまりも前から耳に挟み、十五の頃から放蕩を始めたとする。

この場面での石之助の描写の中で唯一、語り手が石之助の心に分け入る内的焦点化が行われている箇所である。
 一葉は石之助の気持ちをも、「面白からず」、「思ひのまゝに遊びて」（母を泣かせてやろう）と淡々と描くが、親に裏切られるという経験をした、「子供の時には本の少しものぞいた」聡明な少年の心の葛藤は想像に難くない。石之助はこの年で既に壮絶なモラル・ジレンマと直面したのであろう。そして、石之助の心はこれ以後描かれず、語り手は石之助の言動だけを客観的に描くことによって、石之助を後景化していくとともに、心を閉ざすことで石之助の心の闇を伝える。そして、語り手は、放蕩とは言え、石之助のそれは遊びに溺れるというより、どこかで醒めていることを注意深く語る。「男振にがみありて利發らしき眼ざし、色は黒けれど好き様子とて四隣の娘どもが風説も聞えけれど、唯亂暴一途に品川へも足は向くれど騒ぎは其座限り、夜中に車を飛ばして車町の破落戸がもとをたゞき起し、それ酒かへ肴と、紙入れの底をはたき無理を徹すが道樂なりけり」。世間で交わされる山村の評判を聞いた石之助の言葉は、自分の欲望を満たすための道楽とは違う、社会への批判的な眼差しを感じさせる。

また、去歳にくらべて長屋もふふゑたり、所得は倍にと世間の口より我が家の様子を知りて、をかしやをかしや、其やうに延ばして誰が物にする氣ぞ、火事は燈明皿よりも出る物ぞかし、總領と名のる火の玉がころがるとは知らぬか、やがて巻きあげて貴様たちに好き正月をさせるぞと、伊皿子あたりの貧乏人を喜ばして、大晦日を當てに大呑みの場處もさだめぬ

さらに、遊びに走ることには感情にまかせた荒れた行動のように思われるが、その放蕩ぶりに養子の受け手はなかつたと後述される。放蕩は石之助が養子に行かずに済む唯一の方法だったのである。さらに、親たちは石之助は

別戸籍にという案を考え出すが、石之助は格別の処遇をという条件を出し、この話もうやむやにする。石之助の言動や行動は感情にまかせた荒れたもののように思えるが、実はその発話の効果、すなわち発語媒介行為を冷静に考え抜いたものだと言えよう。

石之助に金をせびられた父親は「此山村は代々堅氣一方に正直律義を眞向にして、悪い風説を立てられた事も無き筈」をと、語るが山村の悪評は物語の冒頭で語られ、山村の隆盛は石之助だけではなく、初音町の安兵衛の耳にも入っている。そして、父は「尋常ならば山村の若旦那とて、入らぬ世間に悪評もうけず、我が代りの年禮に少しの勞をも助くる筈を」と言うが、裏で石之助を養子に、別戸籍にと動いていたことは、石之助も看破している。父親が自分自身も気づかない嘘を、石之助は見破っているわけである。別戸籍を逃れたほど、弁の立つ石之助だが、罵倒する父親に反論することはない。この場面では、父親から金を引き出すということが目的であり、自分が感情を爆発させては素も子もなくなるからである。石之助は行動の効果を冷静に計算し、自分を抑える理性を持っている。その冷静さは、癩癩を起こし、感情の起伏のままに行動する御新造とは対照的である。

さらに、語り手は、お峯が「かねて見置きし硯の引出しより、束のうちを唯一枚、つかみし後は夢とも現とも知らず、三之助に渡して歸したる始終を見し人なしと思へるは愚かや。」と語る。石之助が事の一部始終を見ていたとするのは、多くの研究者の見解が一致するところである。未定稿の、石之助がお峯をとがめ、説教をするという筋を一葉は破棄し「引出しの分も拜借致し候 石之助」の書き置きに石之助の意志を凝縮させた。一葉はこの一句によって、お峯の事件を見事に解決する策を石之助がとったという物語構成を用いたことがわかる。石之助は、放蕩という行為によって養子に出すという親たちの企みを止め、引き出しに書き付けを置くという案によってお峯を救う。朝野洋（一九九五）は石之助がお峯にかけた言葉、「お峯下駄を直せ、お玄關からお歸りでは無いお出かけだぞ」はお峯に対する励ましだと指摘する。いずれも、自分の感情を押しとどめ、冷静に考え抜かれた行為であ

る。書き付けの言葉は、その行為の効果、すなわち発語媒介効果を考えた最良の解決策を體現したものだ。石之助は親に見捨てられた時、親に「忠孝」を尽くし、品行方正に生きるという社会的な道德観念を放棄した。石之助はお峯を救ったがそれは社会慣習的な道德原理に基づくものではない。コールバーグの道德性発達理論から見ると、石之助の行為は、法や社会的常識を越え、個人的な道德原理に基づいた道德観念を持つようになる脱慣習的道德段階にあり、そしてお峯を救ったこの行為は、「公正と正義」の段階にあるものの仕業であると考えられよう。石之助の持つ道德概念は、お峯よりさらに進んだ段階にある。そのため、内的焦点化は少ないものの、石之助の言語行為は重みあるものとして、私たちの印象に残るのではないだろうか。

それでは、物語の主人公、お峯の言語行為、そして道德観念についてみていくことにしよう。

四・三 お峯のモラル・ジレンマ

お峯は物語の語り手によって前置化され、読者は、貧しいが誇り高いこの少女の内面に入っていくことができず。そして、語り手の客観的な外的焦点化によるお峯の言語行為を併せて読みとっていくと、『大つごもり』は少女の精神の成長を描いたのではないかという思いに至る。山本欣司(二〇〇九)は『正直』者で『常々をとなしき身』のお峯が追い詰められ、盗みを働き、最終的に御新造に衝突こうとするに至る、内面的・精神的変化のプロセスを『大つごもり』の骨格(メインプロット)(山本欣司、前掲書、四頁)と述べる。山本はお峯が、二つの段階を経て、変貌に至ったと解釈する。二つの段階とは、御新造の裏切りに対する「口惜しさ」が批判意識として明確化する段階、そして「批判的な目」を身につけたお峯が、悪いのは自分ではなく、御新造が人間としての道を踏み外しているのだと、自分の行った行為(盗み)を解釈しなおした段階である。「大つごもりの一日、決定的な危機に直面し、みずからのアイデンティティや世界観に強烈な揺さぶりをかけられたお峯は、それを契機として限界

を突き抜け、さらに高いレベルへとみずからを押し上げた（山本欣司、前掲書、十六頁）」のである。

しかしながら、山本は「御新造の無情そのままに言うてのけ」と御新造を批判した時点に、お峯の覚醒をみる
が、本稿では石之助の書き付けが少女の心に新たな価値観をもたらしたと解釈したい。冒頭ではお峯が自分の評価
基準に依拠し自己完結的な語りをするが、厳しい労働環境の中で徐々にそれまでの価値観を変化させ、周囲の人々
への自分の発話の影響を観察し、発語媒介行為を意識する。そして、お峯は道徳観の強烈なぶつかり合いであるモ
ラル・ジレンマを経て、盗みを犯すが、石之助の行為によって新たな道徳的価値観を持つ段階に進んだと読み取っ
ていく。

冒頭に登場するお峯は自分の内に信念を持った、芯の強い少女である。世の中の裏を見透かすような受宿の老嫗
を「さても恐ろしき事を言ふ人」と批判し、何事も自分の心持ち次第だから、一生懸命勤めれば雇い主の気に入ら
れないことは無いはず、このような恐ろしい人の世話にはなるまいと心に決める。ここには、頑ななまでに自分の
判断基準に依拠し、他者を批判し、切り捨てるといふ若者らしい潔癖さが見える。その判断は揺らぎがなく、「勤
め大事に骨さへ折らば御氣に入らぬ事も無き苦」と健気な少女は必死に働こうと心に定める。厳冬の朝、水で滑っ
て手桶を壊した後、お峯は「其後は物ごとに念を入れて、遂ひに魚想をせぬやうに成りぬ」と語り手は語る。一葉
はたった一行の言葉で流すが、人が一度犯した過ちを二度と繰り返さないためには、歯を食いしばるような必死の
努力、そして揺るがない強い信念が必要であろう。そして、お峯の忠勤ぶりは、下女の入替わりの激しい山村の
状況を承知している町の人々の口にもほる。人は「思へばお峯は辛棒もの、あれに酷く当たれば天罰たちどころ
に、此後は東京廣しといへども、山村の下女に成る物はあるまじ、感心なもの、美事の心がけ」と噂する。山本欣
司（二〇〇九）はお峯の忠勤を支え「何も我が心一つ」といふ論理が行動規範であり、「正直」を実践すること
が内面的主体性の確立と結びついていたと指摘している。

決して社会的に取り結ばれた道徳的規範から外れることのない、誰からもほめられる良い娘、それがお峯である。コールバーグは、慣習的段階では、他人を喜ばせたいという思いや、社会的常識や規則・法律に従うことが道徳観念の基準となるとしているが、安兵衛の難しい願いを聞き入れ、町の人々に賞賛されるお峯は、正直と誠実を守り、過酷な労働に耐えている。物語の冒頭にいる少女お峯は「平等と互惠」の段階にある道徳概念を持っていると言えよう。

しかし、山村家での生活環境は、「勤め大事に骨さへ折らば御氣に入らぬ事も無き筈」と決意していた十八才の少女の心を徐々に変化させる。時として堅固な信念は人の心や目を塞ぐと言われる。思い込みや先入観に捕らわれずに、物事をありのままに観察することは実はたやすいことではない。当初は「何も我が心一つ」と自分の心を律することに向けられていたお峯の目は、外の世界を観察するようになる。お峯が観察力を備えていることは、手桶を割った失敗の後は二度と不始末を犯さなかつた注意深さから窺えるが、安兵衛を助けるために給金の前払いを願う出る場面で、お峯は御新造の起伏の激しい気質を観察しながら、注意深く依頼を進めている。つまり、お峯は人や自分の様子を観察しながら、発話の効果を考え、発話を調整する発語媒介行為を意識するようになったのである。そして、御新造の機嫌を見はからいながら、言葉を選び、気分の変わりやすい御新造の気質を心得て、五月蠅いと感じられてはいけないと言語行為の効果、発語媒介行為を予想し、思いをめぐらす。言語行為の背景には、御新造の行動や表情をじっと見つめ、その感情の動きを細やかに感じ取るお峯の眼がある。

そして、鋭い観察力は、お峯にこれまでとは違った批判力をつけていく。山本欣司(二〇〇九)は、お峯は二圓の前借りを御新造に拒否され、「批判的な目」を身につけ、自分の行った行為を解釈し直したとしているが、お峯は冒頭で受宿の老嫗を手厳しく批判し、初音町の安兵衛宅の極貧の暮らしを見て、「師走の空に芝居みる人も有るを」と裕福な山村家の状況と比べる。お峯はこの時社会の不合理を感じ始めている。冒頭のお峯の批判は自分の内

の価値観に強く依拠したもののだが、その後のお峯は自分の目で観察し、判断するようになっていく。そして、その批判的な眼差しがもっとも強く描かれるのが、一度は承諾した給金の前借りを、やっとの思いで御新造に頼む場面である。御新造からは何の仰せもない。お峯は身に迫った自分の事情を口にし、手をすりながら頼む。

御新造が御機嫌を見はからふに暇も無ければ、僅かの手すきに頭りの手拭ひを丸めて、此ほどより願ひましたる事、折からお忙がしき時心なきやうなれど、今日の晝る過ぎにと先方へ約束のきびしき金とやら、お助けの願はれますれば伯父の仕合せ私の喜びいついまでも御恩に着まするとて手をすりて頼みける、最初いひ出し時ながら結局は宜しと有し言葉を頼みに、又の機嫌むつかしければ五月蠅いひては却りて如何と今日までも我慢しけれど、約束は今日と言ふ大晦日のひる前、忘れてか何とも仰せの無き心もとなさ、我には身に迫りし大事と言ひにくきを我慢して斯くと申ける、

石之助の出現で苛立っていた御新造は聞いていないと知らん振りを決め込む。「御新造は驚きたるやうの惘れ顔して、夫れはまあ何の事やら、成ほどお前が伯父さんの病氣、つゞいて借金の話しも聞きましたが、今が今私しの宅から立換へようとは言はなかつた筈、それはお前が何ぞの間違へ、私は毛頭も覺えの無き事」と冷たく答える。「これが此人の十八番とはてもさても情なし」と語られるご新造への批判は、語り手の言葉かお峯の思いか曖昧にされているが、手をすり合わせて頼むお峯の様子から、読み手はこれに近い悔しい思いをお峯がしたであろうことを推察できる。さすがのお峯も厳しい批判の言葉を心の中で御新造に向ける。そして、山本欣司(二〇〇九)が指摘しているように、ここでお峯は物事を見る位置を大きく変える。

「一度は承知しておきながら、十日とたたぬうちに覆した。それもたかが二圓である」と、お峯は御新造への恨

みの言葉を心の中で吐く。今やお峯は御新造にとっては二圓はたかがと言えるような、たいした金額でないと承知している。しかし、自分や安兵衛にとっては命のかかる金額なのだ。師走に芝居見物に行く家と主が病に伏す極貧の安兵衛の家では二圓の価値が違う。少女は世の中の不合理を感じ始める。人は世の中の趨勢に流されやすい。鋭敏な批判力を持つには、社会常識を越えた、物事の本質を見極める観察力が必要である。しかし、鋭敏な洞察力を持ちながら、無力な少女になすすべはない。

ゑゝ大金でもある事か、金なら二圓、しかも口づから承知して置きながら十日とたゝぬに耄ろくはなさるまじ、あれ彼の懸け硯の引出しにも、これは手つかずの分と一ト束、十か二十か悉皆とは言はず唯二枚にて伯父が喜び伯母が笑顔、三之助に雑煮のはしも取らさるゝと言はれしを思ふにも、どうでも欲しきは彼の金ぞ、恨めしきは御新造とお峯は口惜しさに物も言はれず、常々をとなしき身は理屈づめにやり込る術もなく、すごくと勝手に立てば

そして、お峯は少女が経験するには、あまりにも過酷なモラル・ジレンマの状況に突入することになる。遂にお峯はかけ硯の引き出しに入った二圓に手をつける。人一倍に、正直な自分の心を誇りにしてきた少女の自我が、崩れる瞬間である。厳しい環境にいる自分を支えてきた、正直、誇りという守りを消し去る時の、お峯の悲痛な心の動きを一葉は描き出す。

拜みまする神さま佛さま、私は悪人になりまする、成りたうは無けれど成らねば成りませぬ、罰をお當てなさらば私一人、遣ふても伯父や伯母は知らぬ事なればお免しなさりませ、勿躰なけれど此金ぬすませて下され

と、かねて見置きし硯の引出しより、束のうちを唯二枚、つかみし後は夢とも現とも知らず、三之助に渡して歸したる始終を見し人なしと思へるは愚かや。

しかし、お峯の本当の苦しみは、三之助に二圓を渡した後に、お峯を引き裂くように襲いかかる。自分にはなくても疑いはいずこかに向いてしまふ、言い抜けるのは罪だ、しかし白状すれば伯父に傷がつく、自分が死ぬしかないのだろうか、お峯は自問し、様々な言語行為の可能性とその結果を推測し、苦しむ。

お峯は此出来事も何として耳に入るべき、犯したる罪の恐ろしさに、我れか、人か、先刻の仕業はと今更夢路を辿りて、おもへば此事あらはれずして済むべきや、萬が中なる一枚とても數ふれば目の前なるを、願ひの高に相應の員數手近の處になく成しとあらば、我れにしても疑ひは何處に向くべき、調べられなば何とせん、何といはん、言ひ抜けんは罪深し、白状せば伯父が上にもかゝる、我が罪は覺悟の上なれど物がたき伯父様にまで濡れ衣を着せて、干されぬは貧乏のならひ、かゝる事もする物と人の言ひはせぬか、悲しや何としたらよかる、伯父様に疵のつかぬやう、我身が頓死する法は無きかと目は御新造が起居にしたがひて、心はかけ硯のもとにさまよひぬ。

「お峯お峯、かけ硯を此處へ」と奥の間より呼ばれて、お峯は自分を無理矢理に奮い立たせる。山本欣司(二〇〇九)は、いったんは盗みによって内面的な死を意味するほどの出来事を経験し、自己否定したお峯が、激しく動揺する内面を抱えながらも、理がないのは自分ではなく御新造だという自己肯定へと一気に突き進んでいったと指摘する(山本欣司、前掲書、参照)。しかし、一方で一葉は「それほど度胸すわれど奥の間へ行く心は屠處の羊な

り」という一文で、そうした強い言葉が少女の心にしっかりと存在する思いではなく、理が勝った虚ろな言葉でしかないことを表現する。

この時まで主人に気に入られるようと忠勤に励んできたお峯だが、その主人がたかが二圓の約束を保古にした時、悔しい思いでそれを批判している。そして、自分にとっては死に値するほどの恥辱となる盗みの罪を犯した今、主人である御新造こそが自分を罪に陥れたのだと、少女は自分に向かって空しく諭す。少女は、それが正論であれ、もはや盗みという大罪の前には、何ら効果を持ちえない言語行為であることを見抜いているのだ。ここはお峯が新しい自己分析の視点を獲得し、新たな自己肯定の視点を獲得したというより、悲痛な思いで自分の発語媒介行為の無力さを打ち消そうと理を尽くしている場面と読みたい。

最早此時わが命は無き物、大旦那が御目通りにて始めよりの事を申、御新造が無情そのまゝに言ふてのけ、術もなし法もなし正直は我身の守り、逃げもせず隠られもせず、慾かしらねど盗みましたと白状はしましよ、伯父様同腹で無きだけを何處までも陳べて、聞かれずば甲斐なし其場で舌かみ切つて死んだなら、命にかへて嘘とは思しめすまじ、それほど度胸すわれど奥の間へ行く心は屠處の羊なり。

そして、お峯が世の中をとらえる新たな視点を獲得したのは「引出しの分も拜借致し候 石之助」という一通の書き置きによってであろう。「正直」を信条として生きてきたお峯は、石之助の「嘘」によって救われる。それまでのお峯は、社会的通念であり、幼い頃から教えられてきたであろう「正直」や「忠勤」こそが世の正義であるという思いに支えられてきた。しかし、石之助の意図を察知した瞬間に、それが石之助の気まぐれであれ、社会の常識とは違った「正義」を行う方法があることを知ったのだ。お峯は石之助にとっても「圓は、「たかが二圓」であ

ることを承知している。しかし、石之助が「正直」を通さないことで、もっとも効果的に見事に自分を救ってくれたことが、直前の「正直は我が身の守り」という言い訳が自分の胸に空しく響いたのとは正反対にお峯の心を強く打ったであろうことは容易に想像できる。お峯は新しい道徳的段階の存在、すなわちコールバークの言う法や社会的常識を越え、個人的な道徳原理に基づいた道徳観念を持つ「脱慣習的段階」、そして人の状況により特別な配慮や分配を考える「公正と正義の段階」の存在を知ったのだ。お峯を超えた道徳性を持つという意味でも「石之助はお峯が守り本尊」なのである。

「正直」を信条とするお峯は、石之助の「嘘」によって救われる。ここに一葉の仕組んだ価値の反転、無化がある。そして「大晦日は生の抑圧と収縮を意味する冬の季節が終りを告げる日であり、同時にまたその解放とよみがえりを約束する新春の訪れがあらかじめ用意される日である（前田愛、一九七九、参照）。大つごもりの結びは、お峯の行く末にいかんが厳しい試練が横たわっていようと、少なくとも今だけは心安らかに正月を迎えられるであろうことを暗示している。

最後に、一葉がなぜ「大つごもり」という時間を物語の舞台に選んだのか、考えてみたい。

五 アジール空間への助走

一葉が『大つごもり』に込めた創作意図について、この作品が執筆された当時の状況を考えあわせ、先行研究では主に二つの論が示されていた。豪傑が弱者を救うという古典的お伽噺の型を模したという論と、社会的不合理を背景に貧者の悲劇を描いたという論である。さらに、第二の近代小説としての『大つごもり』論に続く、一葉の背景への言及は最小限に止め、テキストを分析し、その効果に論を収斂させていくつかの先行研究があった。

本稿でも、『大つごもり』をテキストの語りと登場人物の言語行為という視点に絞り、物語を読み取ってきた。

「引出しの分も拜借致し候 石之助」という一句によって、お峯はより広い視野から自己を律する道德理念、真の「公正と正義」という考え方を獲得した。『大つごもり』は、少女のモラル・ジレンマと覚醒を描いた物語なのである。そして、新しい心の世界に入ったお峯に重ね合わせるように、一葉は周到に物語の舞台として、大晦日の慌ただしさから聖域としての正月に抜ける一瞬を用意したのではないかと思われる。

江戸文学の研究者である田中優子（二〇〇四）は冒頭から「井戸は車にて綱の長さ十二尋（二メートル）」で始まる『大つごもり』の大業な数字は江戸文学の手法であり、真に受けるものではなく登場人物の気持ちを表していると説明する。冒頭に続き「勝手は北向きにて師走の空のから風ひゆうひゆうと吹ぬきの寒さ、お、堪えがたと竈の前に火なぶりの一分は一時にのびて」という一節が続くが、ここでも「二（月）↓師走↓一（月）一（日）」という数字の遊びが見られるという。田中（前掲書）によると、『世間胸算用』の中の「巻五 平太郎殿」に、大晦日の住職に次から次へと事が起こり、人が駆け込んでくる場面がある。大晦日に姪が突然出産したと知らせに飛び込んでくる女、借金取りと口論になり、相手の首を絞め、自分も死んだ九蔵の葬式の依頼をする男、頼まれた白小袖が盗まれたと仕立て屋、井戸が壊れたので正月五日間井戸を使わせてほしいと頼む隣人。父親に勘当された息子を連れ、正月四日まで預かってほしいという檀家の妻女。田中（前掲書）はこうした西鶴の描く「この大晦日の慌ただしさを『大つごもり』は大いに参考にした」と記す（田中優子、二〇〇四、参照）。

能の緩急の流れを思わせる終結部までの描き方に注目すると、正月という祝祭空間を象徴するモチーフとして、「上」の中段で、一家をあげての芝居見物が描かれる。さらに、「下」に入ると、貧乏人を救う義賊風小僧を彷彿とさせる石之助が登場する。娘たちは、正月の晴れ着に身をつつみ、羽根を突く。山村家は、ご新造も加わり、家中正月を迎えるお節の準備で余念がない。嫁いだ娘の初産の知らせが入る。父親は恵比寿が鯛を釣ってくるという正月の恵比寿神そのままの目出度さで表現される。初産と富める者も貧しい者も等しく、めでたい正月を迎える

その一瞬へと向かい、次から次へと慌ただしく目出い事が起こる、目の前に迫る祝祭へと空間が歪み、満ちていく様子を、目出度いモチーフを反復しながら、一葉は勢いよく駆け抜けるように描いていく。

言うまでもなく、正月は新年を迎え、歳神を奉る祝祭空間である。そして、祝祭の時間は、日常の苦勞や悩みを一旦傍らに置いて置き、何はともあれ、その短い時間を祝い楽しむ、アジールの空間であるとも言えよう。アジール (parade) とは、権力が及ばない神聖な場所、聖域を指す。『大つごもり』では、盗みの罪を犯したお峯が石之助の「引出しの分も拝借し候」という「受取一通」に救われるが、その瞬間、お峯はそれまでの価値観が無化する、爽やかなアジール空間に足を踏み入れる。

先行研究で指摘されているように、一葉は西鶴のはなしの型を意識し、筆を走らせていることがわかる。とする、『大つごもり』のクライマックスは、お峯の罪が消え、安兵衛一家に一瞬の平安がもたらされ、放蕩息子石之助も、裕福な山村家も、ともかくは正月というアジール空間に入る終結部の一瞬であろう。つまり、一葉は大晦日という舞台装置を用い、正直と嘘、罪と罰、貧と富といった社会が規定する価値が無になる、一瞬のアジールの時間を描こうとしたのではないだろうか。

本稿では、お峯が彼女をしぼってきた、正直、恩、恥といった世間の規範の抑圧から解放され、新たな価値観と対峙するアジール (聖域) に入ることができたことを言語行為から読み解き、少女の成長と共振するように、正月というアジール空間に走り込む「大つごもり」という一瞬を、一葉は舞台として設えたと考えた。

六 終わりに

この誇り高き少女お峯をめぐる事件を描いた『大つごもり』は、古典文学の物語構造を踏襲した上で、登場人物の言語行為に自我の揺れやモラル・ジレンマの視点を投影した、重層的、多声的な読みを可能にする物語である。(註)

『大つごもり』を読んだ時に感じる不思議な思いについてずっと考えてきた。読み慣れた昔のお伽噺を読んだように、それでいて、ある時は深く暗い心の闇へと人の心を揺らす。この不思議な思いは、「語り尽くされた」と表現される研究者たちの論議を読むに連れ、どんどん強くなっていった。本稿では、自分なりにその不思議な思いを整理する試みをした。古典性と近代性を物語に縦糸や横糸のように縦横に巡らし、若い一葉はどのような思いでこの物語を織り上げたのだろうか。百年前に豊かとは言えぬ困窮した環境で、物語を書き続けた一葉の思いに近付くには、その日記から背景や一葉の思いを読み取り、さらに『大つごもり』に続く作品に、この『大つごもり』がどう活かされているか、考察する必要がある。それを課題としながら、一葉の作品研究を続けたい。(注)

注

(1) 物語の全体性を考えるには、バフチンの「多声性」の概念に加え、ジャック・デリダ (Jacques Derrida) のいう範例性 (exemplarite) が参考になる。青柳悦子 (二〇〇九) はデリダの範例性を整理し、範例性とは個々の例が創り出す全体性であり、「一部一部としての顕れ」というかたちをとってしか現実には存在できない芸術的存在が、その本質においては、そうした個々の現実存在を超えた(決して直接手に触れることのできない)存在としてあること、そうした逆説的な構造そのものを指して言われていることに注意したい。(青柳、前掲書、五五頁)と記している。ただし、絵画は時系列を必要としないため範例性が瞬時に捉えられるが、物語は時間を必要とする。物語の範例性は時系列で積み重ねられ、読み手の物語への積極的な関わりによって可能になる。

(2) いずれも、お峯の盗みの現場を石之助が見ていたであろうこと、「かねて見置きし碗の引出しより、束のうちを唯二枚、つかみし後は夢とも現とも知らず、三之助に渡して歸したる始終を見し人なしと思へるは愚かや」という全知の視点の記述が真実であろうことを前提としている(前田愛、一九七九、高田知波、一九九七、他参照)。

(3) 一葉が英雄豪傑に憧れていたことは、明治二六年八月十日の日記に記されている。

七つといふとしより草々紙(くさざうし)といふものを好みて、手まり、やり羽子をなげうちてよみけるが、其中にも一と好みけるは、英雄豪傑の伝、任侠義人の行為などのそゞろ身にしむ様に覚えて、凡て勇ましく花やかなるが嬉しかりき。かくて九つ計(ばかり)の時よりは、我身の一生の、世の常にて終らむことなげかはしく、あはれくれ竹の一ふしぬけ出でしがなとぞあけくれに願ひける。…其頃の人はみな、我を見ておとなしき子とほめ物おぼえよき子といひけり。父は人にほこり給へり。…十二といふとし学校をやめけるが、そは母君の意見にて、女子にながく学問をさせなんは、行々の為よろしからず。針仕事にては学ばせ、家事の見ならひなどさせんとて成き。父君はしかるべからず、猶今しばしと争ひ給へり。…死ぬ計(ばかり)悲しかりしかど、学校は止めになりけり。(一葉日記『塵之中』より)

(4) テキストは「青空文庫—大つごもり」(http://www.aozora.gr.jp/cards/000064/Files/388_15295.html)を資料とし、分析した。

「上」I冒頭部 現在九四字(冬の早朝、辛い井戸周りでの作業)、過去八五七字(受宿の婆の話(二一六字)、桶を割る(二六三字)、きつい御新造(一三七字)、粗相をしないお峯(二六字))、現在一八五字(お峯をめぐるうわさ)

II初音町への見舞い 過去二二六字(秋以来伯父の心配をするお峯)、現在二六〇字(芝居見物の日の見舞い)、過去三九九字(安兵衛の事情と病氣)、現在八九一字(初音町の一家との団らん)、過去二二五字(お峯の父の事情)、現在一五八二字(安兵衛の依頼)

「下」III大晦日の山村 過去六五一字(石之助の十年間の事情)、現在九九五字(石之助の出現—正午)、六七一字(正午—三之助に二円を渡す)、現在六九一字(父を待つ石之助と家族)、現在三二六字(父の言葉)、現在八八三字(石之助の帰還—終結部)、終結部(六六三字)

(5) 例えば、「正直安兵衛とて」、「此山村は代々堅氣一方に正直律義を眞向にして」、「術もなし法もなし正直は我身の守り」

というように「正直」という言葉が繰り返される。また、石之助とお峯は「継子」であり、前田愛（一九七九）、関礼子（一九八）等が指摘するように「贈与」の繰り返しも『大つごもり』のテーマとなっている。

(6) 朝野洋（一九九五）は、石之助が内面を語らないこと、お峯が饒舌であること、石之助の実母の情報がほとんど無に近いことから、一葉がお峯を近景に、石之助を中景に、実母を遠景に描き、物語空間の奥行きを出したと分析している。本稿の分析の視点と重なるが、内的焦点化という視点から、登場人物の語りをより詳細に分析した。

(7) 母の違ふに父親の愛も薄く、これを養子に出して家督は妹娘の中にとの相談、十年の昔より耳に挟みて面白からず、今の世に勤當のならぬこそをかしけれ、思ひのまゝに遊びて母が泣きをと父親の事は忘れて、十五の春より不了簡をはじめぬ、

(8) 発話の間テキスト性を分析するために言語行為論を用いることについて、若干説明を加えておく必要がある。それは言語行為論がデリダによって、批判されているためである。言語行為論の研究者サールはデリダに反論しているが、自然言語の中には「間テキスト性」が顕在化することが多々ある。例えば、「質問」―「応答」という一見単純な隣接対でさえ、自然会話では様々な内容の発話が挿入されることが多い。つまり、現実の会話では相手の表情を見て、途中で表現を調整することも多い。これは「間テキスト性」と言えよう。さらに、先行発話の機能が後行発話によって決められることさえある。例えば、Aが「そのノートすぐきれいな色だね（感想の陳述）」に答えて、Bが「そう、一冊あげるよ」と行った場合、Aの発話は発話Bによって、依頼という機能を持つ。「間テキスト性」は自然発話の分析を難しくしている。しかし、物語という完結したテキストの場合は、コンテキストが既に限定されているために発話の機能の認定は単純になる。物語の解釈は多様性へと開いているが、テキスト自体は固定化され、すなわち閉じている。物語を自己完結的な世界から間テキスト的な世界へ開く視野が必要である。

(9) 「後のこと知りたや」という結びの言葉は、森鷗外の『雁』の一節「古い話である。…読者は無用の臆測をせぬが好い。」と対応する。

(10) なお、物語の言語行為に投影されるジェンダー性について簡単に触れたい。一葉が女性を描いた作品の中で『大つごもり』は異彩を放つ。小林裕子(一九九四)や関口礼子(一九九八)が指摘するように、代償としての性を排除するために、一葉はお峯を一八歳の少女、聖女として造形したという分析は正論であろう。しかし、明治期にあっては社会の不合理に弄ばれる女性ではなく、常識を超え、社会の不合理に目覚めていくという女性を描くこと自体、斬新な試みであったと思われる。ここでは、代償としての性を排除するというより、男性に劣らず、深く思考する個人としての女性を描くために、お峯を「中性」的な少女として造形したと解釈したい。一葉は『大つごもり』に「男性が女性を助ける」という古典的なジェンダー構造を取り入れざるを得なかった。しかし、一葉はこれに満足せず、『大つごもり』を発表した後に、『たけくらべ』『十三夜』『にぎりえ』『われから』と、次々とジェンダーの問題を組み込んだ作品を発表していく。ジェンダーの視点から見ると、一葉は『たけくらべ』で少年のような活発な少女を描き、『にぎりえ』で哲学者のように思考する女性を、『わかれ道』で少女のように小さい青年に大柄な女性を配した。そして、隠喩的な描き方にあきたらず、『うらむらさき』『われから』では夫を捨て、愛人の元を走る妻を描いていく。

参考文献

- 青柳悦子(二〇〇九)『デリダで読む『千夜一夜』』新曜社
- 朝野洋(一九九五)『大つごもり』の遠近法『国文学鑑賞と解釈六〇』、至文堂、三三―三三八頁
- 荒木紀幸(一九八八)『道徳教育はこうすればおもしろい』コーネルバーグ理論とその実践』北大路書房
- 池上嘉彦(二〇〇〇)『日本語論』への招待』講談社
- 井汲明夫(二〇〇九)『大つごもり』の「をどり」について―解説と考察』『城西人文研究三〇』、城西大学経済学会、六一―一五

ウィリアム・J・トーマス・ミッチェル編『海老根宏他訳「物語について」』平凡社＝William J. Thomas Mitchell, Ed. 1980, "On Narrative" The University of Chicago Press.

浦川知子（一九八三）『大つごもり』について『駒沢短大国文二三』駒沢大学、八九―一〇〇頁、

大井田義彰（二〇〇二）『文学界』の中の一葉―『大つごもり』と〈狭〉樋口一葉研究会編『論集 樋口一葉Ⅲ』おうふう、二五―四六頁

菅聡子（一九九六）『大つごもり』論』樋口一葉研究会編『論集 樋口一葉Ⅰ』おうふう、三九―五三頁

北川秋雄（一九九八）『大つごもり』論―孝行ということ』『姫路獨協大学外国語学部紀要一二』姫路獨協大学、一七―三二頁

北田幸恵（一九九五）『大つごもり』論―もう一つの〈闇夜〉（樋口一葉―新たな一葉像へ向けて〈特集〉）『国文学解釈と鑑賞

六〇（六）』至文堂、三九―四五頁

木村真佐幸（一九七五）『大つごもり』成立の背景…『後の事しりたや』一視点』『札幌大学教養部・札幌大学女子短期大学部紀

要七』札幌大学、一七―二八頁

小林祐子（一九九四）『反転するモラル―『大つごもり』論』、新・フェミニズム批評の会編『樋口一葉を読みなおす』學藝書

林、Pp.103-124.

小柳正司（二〇〇四）『ポストコールバークの道徳性発達理論と道徳教育』『鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要一四』五七―

六八頁

榊敦子（一九九六）『行為としての小説―ナラトロジーを超えて』新曜社

佐野安仁・吉田謙二編（一九九三）『コールバーク理論の基底』世界思想社

塩田良平（一九六八）『樋口一葉研究』中央公論社

ジェラルド・ジュネット『花輪光・和泉涼一訳（一九八五）『物語のディスクリール―方法論の試み』水声社＝Gerard Genette, 19

72 "Discourse du recit, essai de method" in Figures III, Seuil.

関礼子 (一九九八) 「贈与と主体―『大っこもり』論」樋口一葉研究会編『論集樋口一葉Ⅱ』おうふう、二二―三三八頁

John L. Austin (一九七五) "How to Do Things with Words" Harvard University Press

John R. Searle (一九六八) "Speech Acts: An Essay in the Philosophy of Language" Cambridge University Press

高田知波 (一九九七) 「距離の物語―『大っこもり』への一視点」樋口一葉論への射程』双文社出版、七―二六頁

滝藤満義 (一九九六) 『大っこもり』―「はなし」の方法』二葉文学 生成と展開』二二―一四八頁

谷川恵一 (一九九三) 「うつつな物語―一葉『大っこもり』を読む」『言葉のゆくえ―明治二〇年代の文学』平凡社

趙恵淑 (二〇〇三) 「樋口一葉『大っこもり』論―〈正直〉をめぐる」『専修国文(七三)』専修大学日本語日文学会、七

一―八九頁

土田知則・青柳悦子 (二〇〇二) 『文学理論のプラクティス』新曜社

中込重明 (二〇〇二) 「樋口一葉『経つくえ』『大っこもり』典拠考」『日本文学誌要六五』法政大学、四九―五九頁

西野常夫 (二〇〇八) 「魯庵による『罪と罰』初訳と新訳の比較」『Comparatio 12』九州大学、六七―七九頁

橋本威 (一九八三) 『大っこもり』覚え書き』『梅花女子大学文学部紀要 国語・国文学 (一九)』梅花女子大学文学部、二

九―五六頁

前田愛 (一九七六) 『大っこもり』の構造』樋口一葉の世界』平凡社

松坂俊夫 (一九八三) 『大っこもり』論』増補改訂版 樋口一葉研究』教育出版センター

松下浩幸 (二〇〇二) 『大っこもり』論―貧民救済言説を手がかりとして』樋口一葉研究会編『論集 樋口一葉Ⅲ』おうふう、

四七―六七頁

山田有策 (二〇〇三) 『大っこもり』の演劇性』『国文学解釈と鑑賞 特集樋口一葉第六八巻五号』至文堂、八四―八九頁

山本欣司(二〇〇九)『正直は我身の守り』—大つごもりを読む』樋口一葉 豊穣なる世界へ』和泉書院、—二〇頁

ローレンス・コールバーク||岩佐信道訳(一九八七)『道徳性の発達と道徳教育—コールバーク理論』広池学園出版||Kohlberg,

L.&Higgrims,A. (1986) "Moral Stages and Moral Education" Tokyo:Uni Publishing